

加藤八千代 著

『子供の夕暮』

(中村書店刊 昭34・11)

三木 紀人

本書を紹介する資格が自分にあるのかどうかを疑いつつ、ともかく書いている。何しろ私はこの本を所持してさえおらず、某図書館蔵本を写したものでまにあわせている始末なのである。

といっても、私が格別怠慢なわけではなからう。

『子供の夕暮』はごく小部数出され、主として知己などに配られたものらしく、出版元に一部もないとのことであるし(電話照会による)、古書店めぐりを日常とする私も、店頭でこれに接したことがない。それほどの稀購本である。また、加藤氏についても、この詩集の著者ということ以外に情報がなく、多少とも詩にかかわる文献のあれこれをひもといても手掛りらしきものがなかなか得られないままになっている。

そんな私がたまたま書名を知ったのは、刊行十一年後（それも、今から二十年近い昔となった）の岩波書店刊『図書』一九七〇年三月号所載の茨木の子氏「美しい言葉とは」という文章によってである。その中で茨木氏は、本書の「あとがき」の、題名にかかわる

大人とは 子供の夕暮ではないのか

という一節を引き、「この一行は、折にふれて、この十年あまりひとつのメロディのように私のなかで鳴る。」と書いている。共感させられる指摘であるが、私一個について言うならば（茨木氏の場合もそうなのかもしれないが）、「メロディのように」鳴るのは、取められた詩のほとんどであって、何かのおりにそのひとふしが心の中でよみがえるのである。

例えば、冒頭の詩は

縄とび

こちらから あちらへと

跳びこえては みたけれど

たった それだけ

というもので、詩自体「たった それだけ」と言いたくなるような短かさであるが、縄とびをしていて無事に跳べたおりにふと心をかすめるささやかなとまどいを伝えて印象深い。人生には、何かにいどんでそれを果たしたとき、なぜかあるむなしさを覚えることが少なくないものであるが、そんなときにこの詩を口ずさむと味わいはひとしおであろう。

以下、この詩には次のような題の詩が並ぶ。

だるまさん あやとり 雪だるま かくれんぼ

おはじき ほおずき かけっこ 石ころ 影

ふみ ボート遊び 戦争ごっこ ピエロ おと

し穴 のぞき眼鏡 知恵の輪 絵本 風船 汽
車ごっこ 凧 鬼ごっこ 花摘み 雪なげ 陣
とりごっこ 砂あそび 陽なたぼっこ 御手玉

独り遊び 石けり 江り台

取り上げられた主題はおおむね子供の遊びであるが、それをほほえましいものとして、余裕ある大人の眼でとらえるのではなく、人生の本質的部分をすでに通過してしまった立場から、喪失感とともに追想している。作者のこうした立場とそれへの思いは、「あとがき」の

わたしたちは 子供の頃に 大人になってす
ることしなければならぬことを 遊びのなか
で すでにしつくしていたのではないだろう
か。そうとも知らない私は ついとかうかと大
人になってしまった。なにやらペテンにかかっ
たような気がしないでもない。

に示されている。前記「大人とは……」の文は、このあと一行分の空白をはさんで記されているのであ

るが、その行間に秘められた思いの深さがしのばれる。

子供の頃の遊びの中に人生のすべてがあるとは、言いすぎのようでもあり、また、似たことが古来よ



く言われてきたようでもある。近年各方面からにぎにぎしく行なわれている遊びへの考察を思いおこすと、この「あとがき」自体の存在感はやや弱くなるかもしれない。しかし、人生の断面や深層を遊びの情景の中にさりげなく映す各詩篇の交響効果の中に、あらためて「あとがき」を置いて、再読三読するならば、何が見えてくるか。それをなお、たしかめていきたいと思っている。

迂り台

夜の斜面を

夕ぐれが迂ってゆく

長いながい影を曳いて――

誰が夕ぐれをとどめられよう

誰が夕ぐれをとらえられよう

末尾の詩である。遊びの時間が終わり、夕暮が不可避の力によってせまってくる。そのように、人の子供から大人に移行して行くのである。遊びに堪能したならば、長くつづく「夕暮」から夜への時間もそれなりの充足感が期待できよう。が、十分遊べず、競争原理の支配する世界に早く招かれ（または追いこまれ）、いつのまにかなしくずしに「夕暮」の中にたたずんでいる昨今の子供たちの眼に、人生はどのように映ることであろうか。

（お茶の水女子大学）